

すゐせんづき よつか
水仙月の四日

雪婆 [ゆきば] んごは、遠 [とほ] くへ出 [で] かけて居 [を] りました。

猫 [ねこ] のやうな耳 [みゝ] をもち、ぼやぼやした灰 [はい] いろの髪 [かみ] をした雪婆 [ゆきば] んごは、西 [にし] の山脈 [さんみやく] の、ちぢれたぎらぎらの雲 [くも] を越 [こ] えて、遠 [とほ] くへでかけてゐたのです。

ひとりの子供 [こども] が、赤 [あか] い毛布 [けつと] にくるまつて、しきりにカリメラ [・・・・] のことを考 [かんが] へながら、大 [おほ] きな象 [ざう] の頭 [あたま] のかたちをした、雪丘 [ゆきをか] の裾 [すそ] を、せかせかうちの方 [ほう] へ急 [いそ] いで居 [を] りました。

(そら、新聞紙 [しんぶんがみ] を尖 [とが] つたかたちに巻 [ま] いて、ふうふうと吹 [ふ] くと、炭 [すみ] からまるで青火 [あをび] が燃 [も] える。ぼくはカリメラ鍋 [なべ] に赤砂糖 [あかさとう] を一 [ひと] つまみ入 [い] れて、それからザラメを一 [ひと] つまみ入 [い] れる。水 [みづ] をたして、あとはくつつくつと煮 [に] るん

だ。)ほんたうにもう一生 [しやう] けん命 [めい]、こどもはカリメラ [・・・・] のことを考 [かんが] へながらうちの方 [ほう] へ急 [いそ] いでゐました。

お日 [ひ] さまは、空 [そら] のずうつと遠 [とほ] くのすさとほつたつめたいとこで、まばゆい白 [しろ] い火 [ひ] を、どしどしお焚 [た] きなさいます。

その光 [ひかり] はまつすぐに四方 [しほう] に発射 [はつしや] し、下 [した] の方 [ほう] に落 [お] ちて来 [き] ては、ひつそりした台地 [だいち] の雪 [ゆき] を、いちめんまばゆい雪花 [せつくわ] 石膏 [せくかう] の板 [いた] にしました。

二疋 [ひき] の雪狼 [ゆきおいの] が、べろべろまつ赤 [か] な舌 [した] を吐 [は] きながら、象 [ざう] の頭 [あたま] のかたちをした、雪丘 [ゆきをか] の上 [うへ] の方 [ほう] をあるいてゐました。こいつらは人 [ひと] の眼 [め] には見 [み] えませんが、一 [いつ] ペン風 [かぜ] に狂 [くる] ひ出 [だ] すと、台地 [だいち] のはづれの雪 [ゆき] の上 [うへ] から、すぐぼやぼやの雪雲 [ゆきぐも] をふんで、空 [そら] をかけまはりもするのです。

「しゆ、あんまり行 [い] つていけないつたら。」雪狼 [ゆきおいの] のうしろから白熊 [しろくま] の毛皮 [けがは] の三角帽子 [さんかくぼうし] をあみだにかぶり、顔 [か

ほ] を苹果 [りんご] のやうにかがやかしながら、雪童子 [ゆきわらす] がゆつくり歩 [あ
る] いて来 [き] ました。

雪狼 [ゆきおいの] どもは頭 [あたま] をふつてくるりとまはり、またまつ赤 [か] な
舌 [したを吐は] いて走 [はし] りました

「カシオピイア、

もう水仙 [すみせん] が咲 [さ] き出 [だ] すぞ

おまへのガラスの水車 [みぐるま]

きつきとまはせ。」雪童子 [ゆきわらす] はまつ青 [あを] なそらを見 [み] あげて見
[み] えない星 [ほし] に叫 [さけ] びました。その空 [そら] からは青 [あを] ばかり
が波 [なみ] になつてゆくわくと降 [ふ] り、雪狼 [ゆきおいの] どもは、ずうつと遠 [と
ほ] くで焰 [ほのほ] のやうに赤 [あか] い舌 [した] をべろべろ吐 [は] いてゐます。

「しゆ、戻 [もど] れつたら、しゆ、」雪童子 [ゆきわらす] がはねあがるやうにして叱
[しか] りましたら、いままで雪 [ゆき] にくつきり落 [お] ちてゐた

雪童子 [ゆきわらす] の影法師 [かげぼうし] は、ぎらつと白 [しろ] いひかりに変 [か
は] り、狼 [おいの] どもは耳 [みみ] をたてゝ一さんに戻 [もど] つてきました。

「アンドロメダ、

あぜみの花 [はな] がもう咲 [さ] くぞ、

おまへのラムプのアルコール、

しゅうしゅと噴 [ふ] かせ。」

雪童子 [ゆきわらす] は、風 [かぜ] のやうに象 [ざう] の形 [かたち] の丘 [をか] にのぼりました。雪 [ゆき] には風 [かぜ] で介殼 [かいがら] のやうなかたがつき、その項 [いたゝき] には、一本 [ぽん] の大 [おほ] きな栗 [くり] の木 [き] が、美 [うつく] しい黄金 [きん] いろのやどりぎのまりをつけて立 [た] っつてみました。

「とつといで。」雪童子 [ゆきわらす] が丘 [をか] のをぼりながら云 [い] ひますと、一匹 [びき] の雪狼 [ゆきおいの] は、主人 [しゅじん] の小 [ちい] さな歯 [は] のちらつと光 [ひか] るのを見 [み] るや、ごむまりのやうにいきなり木 [き] にはねあがつて、その赤 [あか] い実 [み] のついた小 [ちい] さな枝 [えだ] を、がちがち噛 [か] ぢりました。木 [き] の上 [うへ] でしきりに頸 [くび] をまげてゐる雪狼 [ゆきおいの] の影法師 [かげぼうし] は、大 [おほ] きく長 [なが] く丘 [をか] の雪 [ゆき] に落 [お] ち、枝 [えだ] はたうたう青 [あを] い皮 [かは] と、黄 [き] いろの心 [しん] とをち

ぎられて、いまのぼつてきたばかりの雪童子〔ゆきわらす〕の足〔あし〕もとに落〔お〕ちました。

「ありがたう。」雪童子〔ゆきわらす〕はそれをひろひながら、白〔しろ〕と藍〔あゐ〕いろの野〔の〕はらにたつてゐる、美〔うつく〕しい町〔まち〕をはるかにながめました。川〔かは〕がきらきら光〔ひか〕つて、停車場〔ていしやば〕からは白〔しろ〕い煙〔けむり〕もあがつてゐました。雪童子〔ゆきわらす〕は眼〔め〕を丘〔をか〕のふもとに落〔おと〕しました。その山裾〔やますそ〕の細〔ほそ〕い雪〔ゆき〕みちを、さつきの赤毛布〔あかけつと〕を着〔き〕た子供〔こども〕が、一〔いつ〕しんに山〔やま〕のうちの方〔はう〕へ急〔いそ〕いでゐるのでした。

「あいつは昨日〔きのふ〕、木炭〔すみ〕のそりを押〔お〕して行〔い〕つた。砂糖〔さとう〕を買〔か〕つて、じぶんだけ帰〔かへ〕つてきたな。」雪童子〔ゆきわらす〕はわらひながら、手〔て〕にもつてゐたやどりぎの杖〔えだ〕を、ぷいつとこどもになげつけまし森。枝〔えだ〕はまるで弾丸〔たま〕のやうにまつすぐに飛〔と〕んで行〔い〕つて、たしかに子供〔こども〕の目〔め〕の前〔まへ〕に落〔お〕ちました。

子供〔こども〕はびつくりして枝〔えだ〕をひろつて、きよろきよろあちこちを見〔み〕

まはしてゐます。雪童子〔ゆきわらす〕はわらつて革〔かは〕むちを一〔ひと〕つひゆうと鳴〔な〕らしました。

すると、雲〔くも〕もなく研〔みが〕きあげられたやうな群青〔ぐんぜう〕の空〔そら〕から、まつ白〔しろ〕な雪〔ゆき〕が、さぎの毛〔け〕のやうに、いちめん落〔お〕ちてきました。それは下〔した〕の平原〔へいげん〕の雪〔ゆき〕や、ビール色〔いろ〕の日光〔につくわう〕、茶〔ちや〕いろのひのきでできあがつた、しづかな奇麗〔きれい〕な日曜日〔にちようび〕を、一さう美〔うつく〕しくしたのです。

子〔こ〕どもは、やどりぎの枝〔えだ〕をもつて、一生〔しやう〕けん命〔めい〕にあるきだしました。

けれども、その立派〔りつぱ〕な雪〔ゆき〕が落〔お〕ち切〔き〕つてしまつたころから、お日〔ひ〕さまはなんだか空〔そら〕の遠〔とほ〕くの方〔ほう〕へお移〔うつ〕りになつて、そこのお旅屋〔たびや〕で、あのまばゆい白〔しろ〕い火〔ひ〕を、あたらしくお焚〔た〕きなされてゐるやうでした。

そして西北〔にしきた〕の方〔ほう〕からは、少〔すこ〕し風〔かぜ〕が吹〔ふ〕いてきました。

もうよほど、そらも冷 [つめ] たくなつてきたのです。東 [ひがし] の遠 [とほ] くの海 [うみ] の方 [ほう] では、空 [そら] の仕掛 [しか] けを外 [はづ] したやうな、ちいさなカタツといふ音 [おと] が聞 [きこ] え、いつかまつしろな鏡 [かゝみ] に変 [かは] ってしまうたお日 [ひ] さまの面 [めん] を、なかにちいさなものがどンドンよこ切 [ぎ] っつて行 [ゆ] くやうです。

雪童子 [ゆきわらす] は革 [かは] むちをわきの下 [した] にはさみ、堅 [かた] く腕 [うで] を組 [く] み、唇 [くちびる] を結 [むす] んで、その風 [かぜ] の吹 [ふ] いて来 [く] る方 [ほう] をぢつと見 [み] てゐました。狼 [おいの] どもも、まつすぐに首 [くび] をのばして、しきりにそつちを望 [のぞ] みました。

風 [かぜ] はだんだん強 [つよ] くなり、足 [あし] もとの雪 [ゆき] は、さらさらさらさらうしろへ流 [なが] れ、間 [ま] もなく向 [むか] ふの山脈 [さんみやく] の頂 [いたゝき] に、ぱつと白 [しろ] いけむりのやうなものが立 [た] ったとおもふと、もう西 [にし] の方 [ほう] は、すつかり灰 [はい] いろに暗 [くら] くなりました。

雪童子 [ゆきわらす] の眼 [め] は、鋭 [するど] く燃 [も] えるやうに光 [ひか] りました。そらはすつかり白 [しろ] くなり、風 [かぜ] はまるで引 [ひ] き裂 [さ] くや

う、早 [はや] くも乾 [かは] いたこまかな雪 [ゆき] がやつて来 [き] ました。そこらはまるで灰 [はい] いろの雪 [ゆき] でいつぱいです。雪 [ゆき] だか雲 [くも] だかもわからないのです。

丘 [をか] の稜 [かど] は、もうあつちもこつちも、みんな一度 [いちど] に、軋 [きし] るやうに切 [き] るやうに鳴 [な] り出 [だ] しました。地平線 [ちへいせん] も町 [まち] も、みんな暗 [くら] い煙 [けむり] の向 [むか] ふになつてしまひ、雪童子 [ゆきわらす] の白 [しろ] い影 [かげ] ばかり、ぼんやりまつすぐに立 [た] っつてゐます。

その裂 [さ] くやうな吼 [ほ] えるやうな風 [かぜ] の音 [おと] の中 [なか] から、「ひゆう、なにをぐづくづしてゐるの。さあ降 [ふ] らすんだよ。降 [ふ] らすんだよ。ひゆうひゆうひゆう、ひゆひゆう、降 [ふ] らすんだよ、飛 [と] ばすんだよ、なにをぐづくづしてゐるの。こんなに急 [いそ] がしいのにさ。ひゆう、ひゆう、向 [むか] ふからさへわざと三人連 [さんにんつ] れてきたぢやないか。さあ、降 [ふ] らすんだよ。ひゆう。」あやしい声 [こゑ] がきこえてきました。

雪童子 [ゆきわらす] はまるで電気 [でんき] にかかつたやうに飛 [と] びたちました。雪婆 [ゆきば] んごがやつてきたのです。

ぱちつ、雪童子〔ゆきわらす〕の革〔かは〕むちが鳴〔な〕りました。狼〔おいの〕どもは一ぺんにはねあがりました。雪〔ゆき〕わらすは顔〔かほ〕いろも青〔あを〕ざめ、唇〔くちびる〕も結〔むす〕ばれ、帽子〔ぼうし〕も飛〔と〕んでしまひました。

「ひゆう、ひゆう、さあしつかりやるんだよ。なまけちやいけないよ。ひゆう、ひゆう。さあしつかりやつてお呉〔く〕れ。今日〔けふ〕はここらは水仙月〔すみせんづき〕の四日〔よつか〕だよ。さあしつかりさ。ひゆう。」

雪婆〔ゆきば〕んごの、ぼやぼやつめたい白髪〔しらが〕は、雪〔ゆき〕と風〔かぜ〕とのなかで渦〔うづ〕になりました。どどんかける黒雲〔くろくも〕の間〔あひだ〕から、その尖〔とが〕つた耳〔みみ〕と、ぎらぎら光〔ひか〕る黄金〔きん〕の眼〔め〕も見〔み〕えます。

西〔にし〕の方〔ほう〕の野原〔のはら〕から連〔つ〕れて来〔こ〕られた三人〔さんにん〕の雪童子〔ゆきわらす〕も、みんな顔〔かほ〕いろに血〔ち〕の氣〔け〕もなく、きちつと唇〔くちびる〕を嚙〔か〕んで、お互〔たがひ〕挨拶〔あひさつ〕さへも交〔か〕はさずに、もうつづけざませわしく革〔かは〕むちを鳴〔な〕らし行〔い〕つたり来〔き〕たりしました。もうどこが丘〔をか〕だか雪〔ゆき〕けむりだか空〔そら〕だかさへもわ

からなかつたのです。聞 [きこ] えるものは雪婆 [ゆきば] んごのあちこち行つたり来 [き] たりして叫 [さけ] ぶ声 [こゑ]、お互 [たがひ] の革鞭 [かはむち] の音 [おと]、それからいまは雪 [ゆき] の中 [なか] をかけあるく九疋 [くひき] の雪狼 [ゆきおいの] どもの息 [いき] の音 [おと] ばかり、そのなかから雪童子 [ゆきわらす] はふと、風 [かぜ] にけされて泣 [な] いてゐるさつきの子供 [こども] の声 [こゑ] をききました。

雪童子 [ゆきわらす] の瞳 [ひとみ] はちよつとおかしく燃 [も] えました。しばらくたちどまつて考 [かんが] へてゐましたがいきなり烈 [はげ] しく鞭 [むち] をふつてそつちへ走 [はし] つたのです。

けれどもそれは方角 [はうがく] がちがつてゐたらしく雪童子 [ゆきわらす] はずうつと南 [みなみ] の方 [はう] の黒 [くろ] い松山 [まつやま] にぶつつかりました。雪童子 [ゆきわらす] は革 [かは] むちをわきにはさんで耳 [みみ] をすましました。

「ひゆう、ひゆう、なまけちや承知 [しやうち] しないよ。降 [ふ] らすんだよ、降 [ふ] らすんだよ。さあ、ひゆう。今日 [けふ] は水仙月 [すゐせんづき] の四日 [よつか] だよ。ひゆう、ひゆう、ひゆう、ひゆうひゆう。」

そんなはげしい風 [かぜ] や雪 [ゆき] の声 [こゑ] の間 [あひだ] からすきとほるや

うな泣声 [なきごゑ] がちらつとまた声 [きこ] えてきました。雪童子 [ゆきわらす] はまつすぐにそつちへかけて行 [い] きました。雪婆 [ゆきば] んごのふりみだした髪 [かみ] が、その顔 [かほ] に気 [き] みわるくさわりました。峠 [たうげ] の雪 [ゆき] の中 [なか] に、赤 [あか] い毛布 [けつと] をかぶつたさつきの子 [こ] が、風 [かぜ] にかこまれて、もう足 [あし] を雪 [ゆき] から抜 [ぬ] けなくなつてよろよろ倒 [たふ] れ、雪 [ゆき] に手 [て] をついて、起 [お] きあがらうとして泣 [な] いてゐたのです。

「毛布 [けつと] をかぶつて、うつ向 [む] けになつておいで。毛布 [けつと] をかぶつて、うつむけになつておいで。ひゆう。」雪童子 [ゆきわらす] は走 [はし] りながら叫 [さけ] びました。けれどもそれは子 [こ] どもにはただ風 [かぜ] の声 [こゑ] ときこえ、そのかたちは眼 [め] に見 [み] えなかつたのです。

「うつむけに倒 [たふ] れておいで。ひゆう。動 [うご] いちやいけない。ぢきやむからけつとをかぶつて倒 [たふ] れておいで。」雪 [ゆき] わらすはかけ戻 [もど] りながら又 [また] 叫 [さけ] びました。子 [こ] どもはやつぱり起 [お] きあがらうとしてもがいてゐました。

「倒 [たふ] れておいで、ひゆう、だまつてうつむけに倒 [たふ] れておいで、今日 [け

ふ] はそんなに寒 [さむ] くないんだから凍 [こど] やしない。」

雪童子 [ゆきわらす] は、も一 [いち] ど走 [はし] り抜 [ぬ] けながら叫 [さけ] びました。子 [こ] どもは口 [くち] をびくびくまげて泣 [な] きながらまた起 [お] きあがらうとしました。

「倒 [たふ] れてゐるんだよ。だめだねえ。」雪童子 [ゆきわらす] は向 [むか] ふからわざとひどくつきあたつて子 [こ] どもを倒 [たふ] しました。

「ひゆう、もつとしつかりやつておくれ、なまけちやいけない。さあ、ひゆう」雪婆 [ゆきば] んごがやつてきました。その裂 [さ] けたやうに紫 [むらさき] な口 [くち] も尖 [とが] つた歯 [は] もぼんやり見 [み] えました。

「おや、おかしな子こがあるね、さうさう、こつちへとつておしまひ。水仙月 [すみせんづき] の四日 [よつか] だもの、一人 [ひとり] や二人 [ふたり] とつたつていゝんだよ。」

「えゝ、さうです。さあ、死 [し] んでしまへ。」雪童子 [ゆきわらす] はわざとひどくぶつつかりながらまたそつと云ひました。

「倒 [たふ] れてゐるんだよ。動 [うご] いちやいけない。動 [うご] いちやいけないつたら。」

狼 [おいの] どもが気 [き] ちがひのやうにかけめぐり、黒 [くろ] い足 [あし] は雪雲 [ゆきぐも] の間 [あひだ] からちらちらしました。

「さうさう、それでいゝよ。さあ、降ふらしておくれ。なまけちや承知 [しやうち] しないよひゆうひゆうひゆう、ひゆひゆう。」雪婆 [ゆきば] んごは、また向 [むか] ふへ飛 [と] んで行きました。

子供 [こども] はまた起 [お] きあがらうとしました。雪童子 [ゆきわらす] は笑 [わら] ひながら、も一度 [いちど] ひどくつきあたりました。もうそのころは、ぼんやり暗 [くら] くなつて、まだ三時 [じ] にもならないに、日 [ひ] が暮 [く] れるやうに思 [おも] はれたのです。こどもは力 [ちから] もつきて、もう起 [お] きあがらうとしませませんでした。雪童子 [ゆきわらす] は笑 [わら] ひながら、手 [て] をのぼして、その赤 [あか] い毛布 [けつと] を上 [うへ] からすつかりかけてやりました。

「さうして睡 [ねむ] っておいで。布団 [ふとん] をたくさんかけてあげるから。さうすれば凍 [こど] えないんだよ。あしたの朝 [あさ] までカリメラ [・・・・] の夢 [ゆめ] を見 [み] ておいで。」

雪 [ゆき] わらすは同 [おな] じところを何 [なん] べんもかけて、雪 [ゆき] をたくさ

んこどもの上 [うへ] にかぶせました。まもなく赤 [あか] い毛布 [けつと] も見 [み] えなくなり、あたりとの高 [たか] さも同 [おな] じになつてしまひました。

「あのこどもは、ぼくのやつたやどりぎをもつてゐた。」雪童子 [ゆきわらす] はつぶやいて、ちよつと泣 [な] くやうにしました。

「さあ、しつかり、今日 [けふ] は夜 [よる] の二時 [にじ] までやすみなしだよ。ここらは水仙月 [すみせんづき] の四日 [よか] なんだから、やすんぢやいけない。さあ、降 [ふ] らしておくれ。ひゆう、ひゆうひゆう、ひゆひゆう。」

雪婆 [ゆきば] んではまた遠 [とほ] くの風 [かぜ] の中で叫 [さけ] びました。

そして、風 [かぜ] と雪 [ゆき] と、ばさばさの灰 [はい] のやうな雲 [くも] のなかで、ほんたうに日 [ひ] に暮 [く] れ雪 [ゆき] は夜 [よる] ぢう降 [ふ] つて降 [ふ] つて降 [ふ] つたのです。やつと夜明 [よあ] けに近 [ちか] いころ、雪婆 [ゆきば] んごはも一度 [いちど]、南 [みなみ] から北 [きた] へまつすぐに馳 [は] せながら云 [い] ひました。

「さあ、もうそろそろやすんでいゝよ。あたしはこれからまた海 [うみ] の方 [ほう] へ行 [い] くからね、だれもついて来 [こ] ないでいいよ。ゆつくりやすんでこの次 [つぎ]

の仕度 [したく] をして置 [お] いておくれ。ああまあいいあんばいだつた。水仙月 [す
みせんづき] の四日 [よつか] がうまく済 [す] んで。」

その眼 [め] は闇 [やみ] のなかでおかしく青 [あを] く光 [ひか] り、ばさばさの髪
[かみ] を渦巻 [うづま] かせ口 [くち] をびくびくしながら、東 [ひがし] の方 [ほう]
へかけて行 [い] きました。

野 [の] はらも丘 [をか] もほつとしたやうになつて、雪 [ゆき] は青 [あを] じろく
ひかりました。空 [そら] もいつかすつかり霽 [は] れて、桔梗 [ききやう] いろの天球
[てんきう] には、いちめんの星座 [せいざ] がまたたきました

雪童子 [ゆきわらす] らは、めいめい自分 [じぶん] の狼 [おいの] をつれて、はじめ
てお互挨拶 [たがひあいさつ] しました。

「ずるぶんひどかつたね。」

「ああ、」

「こんどはいつ会 [あ] ふだらう。」

「いつだらうねえ、しかし今年中 [ことしぢう] に、もう二へんぐらゐのもんだらう。」

「早 [はや] くいつしよに北 [きた] へ帰 [かへ] りたいね。」

「ああ。」

「さつきこどもがひとり死 [し] んだな。」

「大丈夫 [だいじやうぶ] だよ。眠 [ねむ] つてるんだ。あしたあすこへぼくしるしをつけておくから。」

「ああ、もう帰 [かへ] らう。夜明 [よあ] けまでに向 [むか] ふへ行 [い] かなかちや。」

「まあいゝだらう。ぼくね、どうしてもわからない。あいつはカシオペーアの三 [み] つ星 [ぼし] だらう。みんな青 [あを] い火 [ひ] なんだらう。それなのに、どうして火 [ひ] がよく燃 [も] えれば、雪 [ゆき] をよこすんだらう。」

「それはね、電気菓子 [でんきぐわし] と同じだよ。そら、ぐるぐるぐるまはつてあるだらうザラメがみんな、ふわふわのお菓子 [くわし] になるねえ、だから火 [ひ] がよく燃 [も] えればいゝんだよ。」

「ああ。」

「ぢや、さよなら。」

「さよなら。」

三人 [にん] の雪童子 [ゆきわらす] は、九疋 [ひき] の雪狼 [ゆきおいの] をつれて、

西 [にし] の方 [ほう] へ帰 [かへ] つて行 [い] きました。

まもなく東 [ひがし] のそらが黄 [き] ばらのやうに光 [ひか] り、琥珀 [こはく] いろにかゞやき、黄金 [きん] に燃 [も] えだしました。丘 [をか] も野原 [のはら] もあたらしい雪 [ゆき] でいつぱいです。

雪狼 [ゆきおいの] どもはつかれてぐつたり座 [すわ] つてゐます。雪童子 [ゆきわらす] も雪 [ゆき] に座 [すわ] つてわらひました。その頬 [ほゝ] は林檎 [りんご] のやう、その息 [いき] は百合 [ゆり] のやうにかほりました。

ギラギラのお日 [ひ] さまがお登 [のぼ] りになりました。今朝 [けさ] は青味 [あをみ] がかつて一 [いつ] さう立派 [りつぱ] です。日光 [につくわう] は桃 [もゝ] いろにいつぱいに流 [なが] れました。雪狼 [ゆきおいの] は起 [お] きあがつて大 [おほ] きく口 [くち] をあき、その口 [くち] からは青 [あを] い焰 [ほのほ] がゆらゆらと燃 [も] えました。

「さあ、おまへたちはぼくについておいで。夜 [よ] があけたから、あの子 [こ] どもを起 [おこ] さなけあいけない。」

雪童子 [ゆきわらす] は走 [はし] つて、あの昨日 [きのふ] の子供 [こども] の埋 [う]

づ] まつてゐるとこへ行 [い] きました。

「さあ、ここらの雪 [ゆき] をちらしておくれ。」

雪狼 [ゆきおいの] どもは、たちまち後足 [あとあし] で、そこらの雪 [ゆき] をけたてました。風 [かぜ] がそれをけむりのやうに飛 [と] ばしました。

かんぢきをはき毛皮 [けがは] を着 [き] た人 [ひと] が、村 [むら] の方 [ほう] から急 [いそ] いでやつてきました。

「もういゝよ」。雪童子 [ゆきわらす] は子供 [こども] の赤 [あか] い毛布 [けつと] のはじが、ちらつと雪 [ゆき] から出 [で] たのをみて叫 [さけ] びました。

「お父 [とう] さんが来 [き] たよ。もう眼 [め] をおさまし。」雪 [ゆき] わらすはうしろの丘 [をか] にかけてあがつて一本 [ぽん] の雪 [ゆき] けむりをたてながら叫 [さけ] びました。子 [こ] どもはちらつとうごいたやうでした。そして毛皮 [けがは] の人 [ひと] は一生 [しやう] けん命 [めい] 走 [はし] ってきました。

■このファイルについて

標題：水仙月の四日

著者：宮澤賢治

本文：「注文の多い料理店」

発行：大正十三年十二月一日

販売元：杜陵出版部／東京光原社

新選 名著復刻全集 近代文学館 昭和51年4月1日 発行

(第14刷)

表記：原文の表記を尊重しつつ、以下のように扱います。

○誤字・脱字等は訂正せず、底本通りとしました。

○本文のかなづかいは、底本通りとしました。

○旧字体は、現行の新字体に替えました。ただし、新字体に替えなかった漢字もあります。

新字体がない場合は、旧字体をそのまま用いました。

○繰り返し記号／＼は用いず、同語反復としました。

入力：今井安貴夫

ファイル作成：里実工房

公開：里実文庫 2005年10月30日